

榎 有恒著 『わたしの山旅』

日本の近代アルピニズムは、創生期（明治時代後半）の小島烏水、武田久吉、小暮理太郎、田部重治、加賀正太郎などに続き、大正時代になってからは辻村伊助、榎有恒、松方三郎、浦松佐美太郎などのスポーツアルピニズム派が台頭してくるが、その中でも榎は我が国にヨーロッパの近代登山を紹介して新しいモダン・アルピニズムの流れを創った立役者であった。

彼は、**別稿**でも触れたようにアイガー東山稜を1921年に初登攀、その登高記も含めた処女作が当時ベストセラーとなった『山行』であった。その2年後には、日本で初めての海外遠征隊であるマウント・アルバータ遠征隊（日本山岳会・慶大・学習院大共同）の隊長としてロッキー山脈に残されていた唯一の未踏峰初登を成功させた。

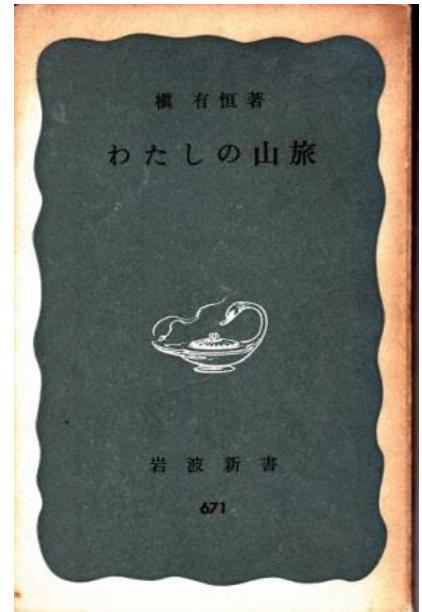
また、還暦を迎えてからも、1956年の第3次マナスル遠征隊の隊長として、マナスルの初登に成功、戦後復興期の暗い時代に日本中を沸かせた快挙となった。余談であるが、当時、私は未だ草深い田舎の中学生であったが、校庭に全校生徒を整列させて校長がこの快挙を誇らしく紹介したのを覚えている。マナスルという山がどこの国にあって、どのように高い山であるかは知る由も無かったが、何か心が騒いだような記憶がある。

私事を重ねて恐縮であるが、高校生になって西堀栄三郎の「南極越冬記」を読んでから南極や山への興味が拵がって、いつかは海外の山や南極にも行ってみたいと秘かに思うようになった。海外の山には会社を定年退職して“毎日が日曜日”になってから出掛けられるようになったが、南極行はついに叶わなかった。南極観測隊の初期の頃は、日大・山岳部OBなどから選ばれた設営担当隊員などは別として、大学の理学系研究者か、気象庁の職員（気象台職員）からの隊員が主であった。気象庁に就職すれば、例えば富士山頂測候所などにも勤められて山で生活できるし、また南極観測隊にも参加できる機会もあるかと幻を夢見たが、世の中はそれほど甘くはなかった。当時、一般ピープル（気象大学校生以外の）が気象庁の職員になるには、まずは「国家公務員上級試験（甲種）」に合格しなければならない。この試験の午前の部は一般教養と語学の試験で、雑学専門だった私は午前の部は片目のケンケンでクリアしたが、午後の部の専門科目の試験（私の場合は物理学）は、講義をサボッてばかりいた私には試験問題の意味すらチンプンカンプンで、早々に試験会場を退散するしかなかった。

ちょっと道草を喰い過ぎたが、本題に戻ろう。

この本は、著者の生い立ちや山行の回想録である。幼少の頃の旅行から登山に目覚めたこと、学生時代や海外での山行のことが自伝風に纏められている。アイガー東山稜初登攀を始めとするスイス・アルプスの登山やそこでの滞在の様子、カナディアン・ロッキーのマウント・アルバータ登頂、また後年のマナスル遠征などが主な内容であるが、国内の登山では冬の立山・松尾峠での遭難の記録（板倉勝宣氏が遭難死、松尾峠の幻影）も収録されている。

また、余り知られていないが、第一次大戦中にアメリカに留学していた頃のアメリカの様子を書いた「アメリカ遊学記」も興味深い。 岩波新書 1968年刊。



[「山書の小溪」目次に戻る](#)